まちむら発見①

薪作りを通した能登の里山保全

石川県七尾市　能登薪人の会

能登薪人の会は、当団体の代表の私と、薪ストーブ設置会社の社員2名にて2011年に立ち上げた任意団体です。代表の私は、金沢大学能登里山里海SDGsマイスタープログラムの1期生であり、その中で里山保全の重要性を学びました。2年間のプログラムの卒業後、何かしら里山保全に関わりたいと思い、自宅に薪ストーブを設置し、燃料の薪の自主調達に乗り出しました。私は県外からの移住者でかつ山主でもないため、薪を調達するためには、①薪を森林組合等の販売会社から購入するか、②自分で山の所有者に木の伐採・搬出の許可を得て、譲渡してもらう必要がありました。里山保全を自分の力でやっていきたいという思いが強かったので、①の購入という選択ではなく、②を選びました。

まず、自宅に薪ストーブを設置した会社に、山主を紹介してくれないか依頼しました。しかし、薪の販売会社や森林組合を紹介してくれたものの、山主まではよく分からないとのことでした。その後、木が倒されているところを見かけては、現場の作業員に声をかけたり、廃材屋へ飛び込みで話をさせてもらいましたが、なかなか無償で渡してくれる相手は見つかりませんでした。



伐採作業の様子



切り出した丸太

そんな折、在住の同市内の七尾市能登島にて、「マツタケ山再生プロジェクト」が発足し、山を整備した際の雑木の処理に困っているとの情報を得ました。七尾市役所を通してプロジェクトのメンバーと話をしたところ、片づけてくれるなら無償で構わないとの連絡をうけました。後日、実際に山の現場を見に行ったところ、そこには10ｔ車何台分もの山積みの木の山がありました。薪ストーブで使用する薪は、1年間に約4～6ｔです。この量を一人で処理するのは難しく、かといって、ようやくつながった

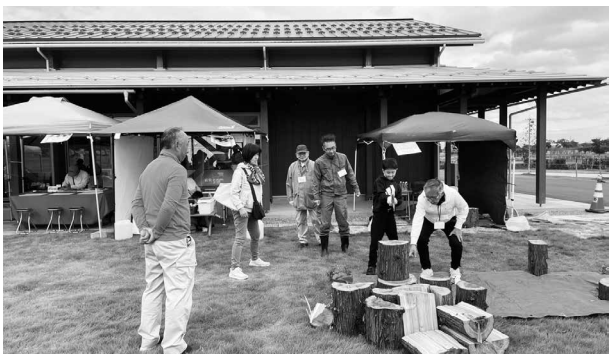
山主との関係は壊したくないという思いがありました。そこで、在住の地域に薪を作るボランティア団体がいないか探してみましたが、販売会社はあるものの、ボランティアで薪を作っている団体は見当たりませんでした。そこで、自分で団体を立ち上げようと、2011年に「能登薪人の会」を設立しました。

当初は3人だったメンバーも、活動を進めていくにつれ山を整備してほしい山主からの依頼が増えたため、仲間も増やし、今では25名となりました。みな趣味から薪作りを初めた人たちではありますが、森林組合のチェーンソーの資格講習を受けたり、伐採や薪割の勉強会をしたりと、意欲的なメンバーで構成されています。

現在の活動は、能登半島の七尾市を中心にしています。2024年1月の能登半島地震の前までは、奥能登地域の能登町や穴水町、珠洲市での活動もしていましたが、現在はそちら方面での活動は中断しています。震災の影響で、解体業者の大型重機やトラックの行き来も多く、道もまだ十分整備されていないところがあるため、もう少し落ち着きましたら、奥能登地域での活動も再開させたいです。活動日は、夏と冬をのぞいて、毎月隔週2回の日曜日です。年間10~12回活動しています。夏と冬をのぞいているのは、夏は猛暑による熱中症、冬は石川は雪が積もりますので、メンバーの安全を考慮しているためです。

活動内容は、山主に許可をいただいた区域にて、樹種を問わず伐採(皆伐のときもあれば間伐のときもあります)し、枝葉は山へ、薪として利用できる幹の部分を丸太にします。切り出した丸太を、参加したメンバーにて各々持ち帰り、各自にて薪割りをして、薪ストーブの燃料としています。1回あたりの作業で、2~3tの木を伐採しています。


作業後の集合写真


薪割り体験

山主にとっては、無償で山を整備してくれる団体として、能登薪人の会としては、無償で山から木を伐採して薪を得られるため、お互いの利害関係が一致し、ひいては地域の里山整備・里山保全の一翼を担う形となっています。その他、地域の里山イベントにて年1~2回、「薪割体験会」を実施し、里山整備の重要性とともに、薪作りの楽しさを伝えています。薪割体験は、子どもたちや女性の参加者が多く、次世代へ里山保全活動に興味をもってもらう良い機会となっていると感じています。また、薪割体験会を通して、新たなメンバーに加わる人もおり、活動の幅がどんどん広がっています。

このような活動成果が認められ、「令和2年度いしかわ森林環境功労者表彰」をいただきました。この賞は、森林環境の保全に対する貢献が顕著であり、他の模範となる者に対して表彰され、自発的な森づくり活動の推進に資する団体へ与えられます。

能登薪人の会は、「安心、安全、無理なく楽しく」をモットーに活動しています。今後もメンバーを増やしながら、能登を中心とした薪づくり活動、里山整備活動を進めていきたいと思います。

(能登薪人の会代表　川上和孝)